大学の今がわかる情報誌

IKUEI NEWS

2009.1 vol.45

電通育英会

明日への視点

大学生が身につけるべき力

大学を訪ねて

愛媛大学

インタビュー

先輩！こんにちは

映画照明／大庭 郭基さん

連載

〈時代はくりかえ史〉加来 耕三

寄稿1　学生に身につけてほしい力

国際的に通用する教養と語学力こそ これからの学生が学ぶべきこと

人間力の基礎であるリベラルアーツを学ぶことが大学生の使命。
国際的に通用する語学力を身につけ、グローバル時代に必須の教養を。

国際教養大学 理事長・学長
中嶋　嶺雄

多面的で基礎的な教養を身につける

私どもの大学では、これからの時代に一番必要な力として「国際教養」というコンセプトを掲げています。

18歳から19歳くらいの高校生が入学して一番身につけなければならないことは、深い教養と幅広い知識です。国際教養の根本はリベラルアーツで、人文・社会科学の基礎を学士課程のうちにきちんと学ばなければなりません。

リベラルアーツという言葉は、しばしばアーツ・アンド・サイエンシズとも呼ばれます。つまり、教養分野や人文・社会科学と同時に、サイエンスも入ります。文系、理系を問わず、そうした基礎を学ぶことが非常に大切です。

国際教養大学は文系の大学ですが、数学も代数学や統計学をきちんと学べますし、化学、物理、生物は実験まで組み込んだ授業をしています。同時に、音楽や美術史にも力をいれています。渡辺玲子さんのように世界的なバイオリニストが実際にクラスを持っていますし、美術史の場合はミケランジェロの専門家の田中英道さんがずっと講義を続けています。文系、理系、そして芸術分野。これがまさにリベラルアーツだと思います。

しかし、これからのグローバル化の時代は、もう一つの要件が必要なのではないでしょうか。それはまさに、グローバルな時代に必要なコミュニケーション能力であり、日本が一番弱い発信力、発言力です。

CNNにも時々出ているニューズウィークのザカリヤさんは、日本と中国の外交官を比べると、全く勝負にならないほど中国の外交官の方が優れている、といいます。中国の外交官は、国際組織とは何かという知識、会議前の準備、ストラテジー、タクティクス、そうしたことに非常に長けている。一方、日本の外交官は常に上司ばかり見ていて、まったく自発性がない、というのがその理由です。そのうえ、彼らは英語ができない。英語を十分にしゃべれないために日本の存在感が小さくなっていると言っています。

外国語を身につけ
自分の中に別なる宇宙を創る

国際教養大学は、国際的な貢献と、地域に貢献する人材育成という二つの大きなミッションを持っています。特に国際的に活躍する人材育成のためには、外国語の運用能力が決定的に重要だと考えています。

TOEFLのPBTで600点以上取らないと、英語が出来るとはいえません。600点以上を取って初めて、英語で仕事もできる。しかし現状では、600点以上を取っている割合は、日本の全大学生の0・2%前後に過ぎません。

大学時代に一番身につけてほしいのは外国語でのコミュニケーション能力です。これがまさ

に、国際教養です。従来型の教養に加えて、グローバル化時代に備えた国際的なコミュニケーション能力。そこでの国際語としての使用言語は英語と決まっています。論争の余地はありません。日本から外に出れば全て英語の世界です。

昨年末に福岡で日本、中国、韓国の首脳会議がありました。たがいに飛行機で2時間ほどの位置にあり、欧米人から見れば人種の違いも分からないほど近い関係です。それなのに、通訳をつけないとコミュニケーションができない。これを英語でやれば、通訳なしでコミュニケーションできるわけです。いかに英語が普遍語か、グローバル・ランゲージか、ということです。

そういう時代に対応するためにも英語をきちんと学んでほしい。英語を学んでおくと、単に国際的に活躍できるだけではなく、インターネットから世界の情報を入手したり発信したりすることもできますから。

しかし、英語だけやっていればいいというわけではありません。英語以外にもう一つ外国語を学ぶべき、というのが私の主張です。母語である日本語と、普遍語としての英語に加えて、さらにもう一つ言語を学ぶと、お互いの言語空間が刺激しあって、ボキャブラリーも増え、最終的には母語が非常に磨かれることになります。これは"プルリリンガリズム(Plurilingualism)"という考え方で、EUでは言語教育の先端的なあり方になりつつあります。

私の場合は高校時代にフランス語を学び、大学では中国語を専攻し、仕事上英語を使わないわけにはゆかない、ということでやってきました。外国語を学ぶことは、心の中にその言語の世界を作ることです。言葉ができると、自分の心の中にもう一つの宇宙が出来ます。

中嶋　嶺雄（なかじま　みねお）

1936年長野県松本市生まれ。東京大学大学院修了、社会学博士。国際社会学者。東京外国語大学学長、アジア太平洋大学交流機構（UMAP）国際事務総長、文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長・外国語専門部会主査）、財団法人大学セミナー・ハウス理事長などを歴任。また、オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院で客員教授を務める。平成15年度「正論大賞」受賞。2004年4月より現職。現在は社団法人才能教育研究会会長などを兼務。著書に『現代中国論』、『北京烈烈』（サントリー学芸賞受賞）、『国際関係論』、『21世紀の大学』など多数。

アカデミズム、クリエイティビティで個性を身につける

学生にとって大学は、まず第一に学問をする場です。色々な経験をすることも大切ですが、まずはアカデミックな雰囲気をきちんと学んでほしい。一生のうちで大学の四年間というのは最も知的な刺激が多い時代ですから。その時代にアカデミズムとは何か、ということをきちんと自覚してください。例えばその中には、「万葉秀歌」を読む、といった幅広い教養も入ると思います。

それから、きちんと目的を持って日々を過ごしてほしい。学士課程の四年間で十分な力を付けられなかったと感じるなら、あるいは英語力がまだ足らないと感じるなら、もう少し大学にいればいいんです。学生諸君は、自分の大学生活を自分の考えでプランニングしなければなりません。

学生時代というのは、人生で最もクリエイティブな時期です。そのクリエイティブなことを、自分なりの個性を持ってやってほしい。これからの時代は競争の時代でもあるわけですから、個性化を図らないと、とても立ち行かないのではないでしょうか。

自分の大学生活を設計するということは、非常にやりがいのあることです。学生諸君には、ぜひ頑張ってもらいたいと思います。